

『#野良犬』(1949年：黒澤明監督)をNHK BSで視聴した。監督はあまりにも有名な日本映画の巨匠。本作において、ドキュメンタリータッチで描く刑事ものという新しいジャンルを開拓し、その後の同系作品に影響を与えたという。第23回キネマ旬報ベスト・テン第3位。芸術祭賞。都民映画コンクール 銀賞。

黒澤はサスペンス映画を作ろうと新人の脚本家を抜擢し、彼を警視庁に通わせて、警官が拳銃を紛失することがあるというエピソードを入手、それを基に脚本を作り上げたそうだ。戦後の街並みや風俗とその中で生きている諸々の登場人物が生き生きと描写されている。劇中、刑事2人が拳銃の闇ブローカーを捕まえるシーンでは、実際の巨人対南海の試合映像が使われている。劇中の使用の音楽にも工夫があるそうだ。「ラ・パロマ」、クーラウのピアノ曲ソラチネ第1番ハ長調作品20-1、東京ブギ等の流行歌、ドナウ川のさざなみが使われている。

復員してきた男が二人。二人ともその際に貴重品の入ったリュックを盗まれる。一人は刑事(M)となり、もう一人は殺人者(Y)となる。何が二人の運命を分けたのか。

終戦直後の東京を舞台に、拳銃を盗まれた若い刑事がベテラン刑事と共に犯人を追い求める姿を描いた。ある猛暑の日、刑事Mは射撃訓練からの帰途のバス中で隣に立った女性に拳銃を掏られ、追うも見失ってしまう。拳銃の中には7発の銃弾が残っている。Mは調べるうちにある女スリに目星を付ける。Mは執拗に女すりをつけ回す。Mはついにピストルの闇取引の現場を突き止め、ある復員兵を先輩刑事と追い始める。そんな中、ピストルによる発砲事件が発生する。Mの盗まれたピストルの弾痕と一致していた。責任を感じて辞職を決意するが、先輩刑事に諭され翻意する。その後、ピストル屋のヒモの女を聴取して、拳銃の闇ブローカーの存在を突き止める。闇ブローカーが野球好きだと知り、野球場での捕物となる。米穀配給通帳からピストルはYという男の手元にあることが判明。そこからYへの追跡が始まる。そんな中で、YもMと同じく復員の際にリュックを盗まれた体験があることを知る。

そうこうするうちにMの拳銃で強盗殺人事件が発生する。まだピストルには弾が5発残っている。追跡中、先輩刑事がYの凶弾に倒れてしまう。MはYを追い詰めるが、無事に捉えることができるのか。

復員兵と犯罪の関係は、戦後日本社会の混乱と深く結びついている。

1. 社会復帰の困難と犯罪

終戦後、約 700 万人の兵士が復員したが、その多くは職を失ったり、住居や家族を失っていたり、心身に深い傷を負っていた。特に PTSD を抱えた復員兵は、社会復帰が困難で、精神的な不安定さから暴力や犯罪に関与するケースもあった。

2. 闇市と非合法活動

復員兵の一部は、生活の糧を得るために闇市や非合法取引に関わるようになった。中には、軍隊での経験を活かして暴力団や愚連隊に加わる者もいた。

3. 社会的スティグマと孤立

精神的な障害を抱えた復員兵は、「役立たず」「女々しい」といった偏見にさらされ、家族や地域社会から孤立することもあった。

4. 国家の責任と不可視化された歴史

復員兵の苦悩や犯罪への関与は、長らく「個人の問題」として扱われ、国家や社会の責任は問われなかった。しかし近年では、こうした問題を「国家が引き起こした戦争の帰結」として捉え直す動きも出てきている。

復員兵を描いた映画

『我等の生涯の最良の年』(The Best Years of Our Lives, 1946 年) 第二次世界大戦から帰還した 3 人の兵士が、それぞれの家庭や職場で直面する困難を描いたヒューマンドラマ。

『ランボー』(First Blood, 1982 年) ベトナム帰還兵ジョン・ランボーが、社会からの疎外と警察の暴力に直面し、暴発していく姿を描いたアクション映画。

『マイ・ブラザー』(Brothers, 2009 年)

アフガニスタンから帰還した兵士が、PTSD に苦しみながら家族との関係を再構築しようとする姿を描いた作品。

『瀬戸内少年野球団』(1984 年) 戦後の復員兵と地域社会の関係を背景に描いた作品。戦死とされた夫が帰還し、再婚話が進んでいた妻との間に生じる葛藤を、子どもたちの視点を交えて描いている。